

洛陽市 640 万市民市内 130 万市民主な産業・観光・農業・工業（トラクター・鉱山機器・ガラス）

## 洛陽古墳博物館・白馬寺・嵩山少林寺・龍門石窟・関林廟

### 洛陽古墳博物館

前漢から北宋までの集合墓地があるところで、一部の墳墓が復元、公開されている。様々な壁画が見所。洛陽市周辺から発掘された珍しい墓葬を多数移築した地下式博物館である。1987 年開館、総面積 8200 m<sup>2</sup>。歴代典型墓葬展示区と北魏帝王陵墓（宣武帝の景陵）展示区の二つの展示区画を設置してある。歴代典型墓葬展示区は面積 7600 m<sup>2</sup>、地下展示スペースは「口」型の 4 ブロック（両漢墓、魏晉墓、唐宋墓、壁画墓）に分けられ、前漢から金代にいたる代表的な墓葬 31 基（内 8 基が壁画墓）が展示されている。特に前漢、後漢、三国期の昇仙、打鬼、四神、天象、儀仗などを描いた壁画墓は必見である。北魏帝王陵墓展示区は墓葬展示区の西側にあり、中国古代皇帝陵で唯一内部を見学できる。面積は 600 m<sup>2</sup>、墳丘の上に登り、洛陽市内が一望でき、周囲の展望を楽しめる。北には北魏孝文帝の墳丘が望める。北側に墓誌館が建設中。完成後、当館所蔵の貴重な墓誌が展示される。

三国志の英雄・関羽の首が葬られたと言われるところ。関羽像のほか、墓志碑や洛陽出土の獅子などの石像が展示されている。門や堂の壁面には、三国志の名場面が描かれ、清の乾隆帝や光緒帝や西太后御筆の額などもある。夏・商・東周・後漢・曹魏・西晋・北魏・隋・唐・後唐・後梁。 1400 年以上にわたり、11 の王朝が都を置いた古都洛陽。市の北部一帯には一万以上の古代墳墓があり、30 数年に及ぶその発掘調査を基に、墳墓専門の施設として設立されたのが"洛陽古墳博物館"なんだそうです。



洛陽古墳博物館の全景



洛陽古墳博物館入り口門 博物館の本館は地下に墓がある



洛陽古墳博物館本館



三国志の英雄・関羽の首が葬られたと言われる所



北魏孝文帝の墳丘



地下展示場



三国志の名場面が描かれている



地下展示場通路



展示物



何時の時代の磁器ですか



展示物何を著していますか



両側に復元された古代墳墓が並ぶ地下通路



一番奥が王の墓 左右にも墓



生活用品が展示されています



何を現している像ですか



何方の石棺ですか



墓の天井 宋墓墓室磚雕

白馬寺 中国最初の仏教寺院。寺の名は、67年、後漢の明帝が派遣した使者が、インドの高僧二人とともに、白馬に仏典を乗せて帰って来た事にちなむと言われる（創建はその翌年）。寺の東には、唐の宰相・狄仁傑をまつた狄公祠、斉雲塔という13層の塔がある。蔡愔（さいいん）と秦景二人が仏教經典を求めて西に向かい天竺僧の摂摩騰、竺法蘭に出会い白馬に經典を積み洛陽に帰還した。中国で最初に建立された仏教寺院である白馬寺迦葉摩騰（（かしょうまとう、生没年不明）はインドの仏教の僧侶）と竺法蘭（じくほうらん）（5世紀ころから、仏教を伝えた最初の僧という伝説が定まった）の二人の僧が、白馬に乗り『四十二章經』5部の經典を携えて、都の洛陽を訪れたという説話に因んで、白馬寺と名づけられた。中国最古の仏教寺院である。市街から東へ12キロほどの所に位置する、後漢時代の68年に創建された中国最古の仏教寺院である。現在境内には、天皇殿、大仏殿、大雄殿といった伝統的な四合院形式による建築物がたたずみ、歴史を感じさせる。三蔵法師の西行は白馬寺が立てられた500年後であり玄奘は洛陽付近の村に生まれ、唐の時代の人です。洛陽の浄土寺で18歳まで修業し、AD629年から、16年間かけて、天竺から

仏教の聖典を持って帰った。その後、西安の大慈恩寺に仏典を翻訳していた。大雄殿は伽藍の中で最も大規模で壮麗な建築物である。

殿内には三世仏、二天将、十八羅漢などの宋代の像が収められている。



白馬寺山門



白馬寺石門



大仏殿



左に鼓楼



右に鐘樓



狄公祠、齊雲塔の13層の塔



韋馱天像



白馬の石造



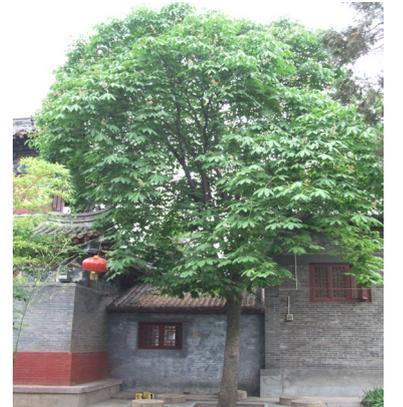
弘法大師空海像



玄奘三蔵石画



撰摩騰と竺法蘭の墳墓



菩提樹



菩提樹の葉



牡丹園

**嵩山少林寺** (すうざん しょうりんじ) 中国の河南省鄭州市登封にある中岳嵩山の中の少室山の北麓にある寺である。嵩山は中国五岳のひとつに数えられ、古くから神聖視されてきた。中岳廟、嵩陽書院など数多くのみどころが散在する。インドから中国に渡来した達磨による禅の発祥の地と伝えられ、中国禅の名刹である。

495年、北魏の孝文帝はインド僧・跋陀三蔵のために、少室山（嵩山の一部）の麓に仏寺を建立した。その寺は「少室山麓の叢林の地」という位置にちなんで、「少林寺」と名づけられた。その後、インドの僧・達磨がここで禅宗を始めた。

嵩山は中国五岳のひとつに数えられ、古くから神聖視されてきた。中岳廟、嵩陽書院など数多くのみどころが散在する。前身は北周（ほくしゅう、556年 - 581年）代に洛陽城内に宣帝（（せんてい）は北朝北周の第4代皇帝。）が創建した陟岵寺。隋の文帝代に、勅によって寺名を少林寺と改める。『魏書』巻114「釈老志」によれば、その創建は、496年（太和20年）で、孝文帝が西域沙門の仏陀禪師（釈老志では跋陀、仏陀は『続高僧伝』巻16の表記による）の住寺として、少室山陰に建立したとされる。その後禅宗では、唐代の『伝法宝紀』の時代になって初めて、菩提達磨がこの寺で面壁九年に及び座禅し、慧可が師の面前で断臂した寺であると伝承されるに至り、『宝林伝』以後の燈史が、それを踏襲する。（インド仏教第28祖で中国禅の初祖となる達磨が壁に向かって9年間座禅していたところに、二祖慧可が訪ねて達磨の教えを求めたという。（慧可は達磨の弟子になるため腕を切赤い雪を作り弟子入り出来た）。達磨大師は禅宗の開祖。

中国の拳法は古来「南拳」「北拳」の言い方がありますが、「南拳」とは湖北省にある武当山の拳法を指す言葉であり、「北拳」の発祥地はここ少林寺です。中国禅の名刹である。また少林武術の中心地としても世界的に有名。なお、しばしば誤解されるが、少林寺拳法は日本で創始されたものであり、現在の嵩山少林寺の武術とは別物である。伽藍は壮麗な七堂伽藍であり、北西には初祖庵、南西には二祖庵があり、五乳峰中には達磨洞がある。1928年に、軍閥混戦の最中に隋末以降最大の大火があり、天主殿、大雄殿、法堂、鐘楼、鼓楼、客堂、庫房、香積厨、東西禅堂、緊那羅殿、六祖堂、閻王殿、龍王殿などの寺の主要建造物が燃えてしまった。また、寺に収蔵されていた明代の銅版經典、「少林寺志」の木版、魏代に作られた仏像や碑、および達磨面壁影石と仏堂に陳列されていた儀杖も全部焼失した。最近、天主殿、緊那羅殿、東西禅堂と僧院は復元された。

嵩山少林寺は広大な敷地です、現在は大規模な観光地である、現住職は中国仏教会の会長です。全体を見学するだけでも半日以上時間を要する。



石で出来た少林寺の門



寺の山門



少林寺拳法銅像



三世仏



白玉仏の涅槃



達磨大師像



少林寺初代住職の墓



歴代の墓



達磨大師の石像



前住職墓、白塔の下部には何故か現代の飛行機・パソコンなどが刻まれている



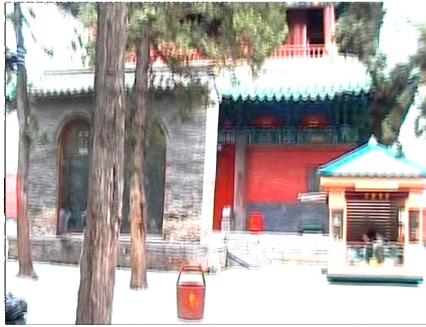
広い境内の参道



四天王



四天王



大きな左に鼓楼、右に鐘樓



大きな立派な山号額



天下第一の祖庭



菩提達磨の墓が有ると言われる山



立雪亭石塔



山号額

**龍門石窟** 中国湖南省洛陽市の南方 13 キロ、伊河の両岸にある洞窟寺院。「龍門石窟」としてユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている。北魏の孝文帝が山西省の大同から洛陽に遷都した 494 年（太和 18 年）に始まる。仏教彫刻史上、雲崗期の後を受けた、龍門期（494 年 - 520 年）と呼ばれる時期の始まりである。龍門石窟の特徴は、その硬さ、すなわち雲崗の粗い砂岩質と比較して、緻密な橄欖岩質であることである。そのため、北魏期においては、雲崗のような巨大な石窟を開削することが技術的にできなかった。『魏書』釈老志にも、500 年（景明 2 年）に宣武帝が孝文帝のために造営した石窟は、規模が大きすぎて日の目を見ず、計画縮小を余儀なくされた顛末を記している。様式上の特徴は、面長でなで肩、首が長い造形であり、全体的に華奢な印象を与える点にある。また、中国固有の造形も目立つようになり、西方風の意匠は希薄となる。裳掛座が発達して、装飾も繊細で絵画的な表現がされるようになる。最初期は 5 世紀末の「古陽洞」窟内に見られる私的な仏龕の造営に始まる。先述の宣武帝の計画を受けて開削された「賓陽洞」3 窟のうち、実際に北魏に完成したのは賓陽中洞のみであり、賓陽南洞と北洞の完成は唐の初期であった。その他、北魏時期の代表的な石窟としては、「蓮華洞」が見られる。また、北魏滅亡後も石窟の造営は細々とながらも継続され、「葉方洞」は北齊から隋にかけての時期に造営された石窟である。唐代には、魏王泰が賓陽 3 洞を修復し、褚遂良に命じて書道史上名高い『伊闕仏龕碑』を書かせ、641 年（貞観 15 年）に建碑した。初唐の代表は、656 年 - 669 年（顕慶年間～総章年間）に完成した「敬善寺洞」である。その後、「恵簡洞」や「万仏洞」が完成し、この高宗時代に、龍門石窟は最盛期を迎えることとなる。その絶頂期の石窟が、675 年（上元 2 年）に完成した「奉先寺洞」である。これは、高宗の発願になるもので、皇后の武氏、のちの武則天も浄財を寄進している。その本尊、毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）の顔は、当時既に実権を掌握していた武則天の容貌を写し取ったものと言う伝説があるが、寄進と時期的に合わず今では否定されている。また、**武則天は弥勒仏の化身**と言われ尊像としても合わない。龍門最大の石窟である。武則天の時代には、西山の南方、「浄土洞」の付近まで造営が及んだので、武則天末より玄宗にかけての時期には、東山にも石窟が開削されるようになった。「看経寺洞」がその代表である。なお彫られた仏像のそばには造像の動機や供養文、刻者の名前や刻した年月などが造像記として彫りつけられているが、北魏代に彫られたものうち特に優れた 20 点が「龍門二十品」という六朝楷書（りくちようかいしよ）の書蹟として知られている。およそ 400 年にわたって、10 万体のもの仏像が刻み込まれていた。奉先寺（ほうせんじ）は、中国の洛陽郊外、龍門最大の規模をほこる寺院である。本尊である大仏

の仏座の北側に、唐の玄宗・開元 10 年（722 年）に補刻された「河洛上都龍門之陽大盧舍那像龕記」碑の碑文の記述によれば、大仏龕は高宗の時の創建であるという。大仏の肉髻から仏座までの高さが 17.14m、向背まで含めると約 20m。仏龕の東西の深さが 38.7m、南北の広さが 33.5m である。碑記によれば、咸亨 3 年（672 年）に、皇后の武氏が脂粉錢 20,000 貫を施助し、上元 2 年（675 年）に完成したという。さらに、調露元年（679 年）に、勅を奉じて大像龕の南に大奉先寺を置き、翌年の正月に、高宗が寺額を書いた、と続いている。その本尊の面貌は、武皇后、のちの則天武后のそれを写したという説がある。また、造営の責任者は、中国浄土教の祖の一人である善導であった。（奈良の大仏は奉先寺がモデル）（手の部分は余りにもお参りも多く線香の熱で崩れた）奈良の東大寺は遣唐使達が模写して造営したもので奈良の大仏より大きな磨崖仏。奉先寺洞は大仏坐像を中心に左右に弟子・菩薩・天王・力士の巨像がそれぞれの役割で優しく、荒々しく迫っている。菩薩は気品高く優雅、力士は両足で夜叉を踏みつけている。ここ間口は 50m、かつては木造の堂宇があり大仏は全身に金箔が貼られ光輝いていた。敦煌莫高窟、大同・雲崗石窟とならぶ、中国三大石窟のひとつ。北魏の大同から洛陽への遷都（494 年）の頃から建造が始まり、約 400 年間にわたって彫り続けられた。伊河の兩岸、龍門山と香山の山肌に約 10 万体の仏像が彫られている。北魏時代の賓陽洞、1 万 5 千もの仏像が彫られた万仏洞、奉先寺の盧舍那仏などが有名。最初期は 5 世紀末の「古陽洞」窟内に見られる私的な仏龕の造営に始まる。先述の宣武帝の計画を受けて開削された「賓陽洞」3 窟のうち、実際に北魏に完成したのは賓陽中洞のみであり、賓陽南洞と北洞の完成は唐の初期であった。その他、北魏時期の代表的な石窟としては、「蓮華洞」が見られる。また、北魏滅亡後も石窟の造営は細々とながらも継続され、「藥方洞」は北齊から隋にかけての時期に造営された石窟である。唐代には、魏王泰が賓陽 3 窟を修復し、褚遂良に命じて書道史上名高い『伊闕仏龕碑』を書かせ、641 年（貞観 15 年）に建碑した。初唐の代表は、656 年 - 669 年（顕慶年間～総章年間）に完成した「敬善寺洞」である。その後、「恵簡洞」や「万仏洞」が完成し、この高宗時代に、龍門石窟は最盛期を迎えることとなる。その絶頂期の石窟が、675 年（上元 2 年）に完成した「奉先寺洞」である。これは、高宗の発願になるもので、皇后の武氏、のちの武則天も浄財を寄進している。その本尊、盧舍那仏の顔は、当時既に実権を掌握していた武則天の容貌を写し取ったものと言う伝説があるが、寄進と時期的に合わず今では否定されている。また、武則天は弥勒仏の化身と言われ尊像としても合わない。龍門最大の石窟である。武則天の時代には、西山の南方、「浄土洞」の付近まで造営が及んだので、武則天末より玄宗にかけての時期には、東山にも石窟が開削されるようになった。「看經寺洞」がその代表である。



龍門石窟全景



河の反対側にも寺と石窟



龍門石窟 (奉先寺)

龍門 (西山)



龍門石窟 (奉先寺) 奈良の東大寺は遣唐使達が模写して造営した

龍門石窟 何万対の石仏増の一部



龍門石窟 (奉先寺) 天王 金剛力士



龍門石窟 (奉先寺)



龍門石窟 (奉先寺)



龍門石窟 (奉先寺)



龍門石窟 (奉先寺) 毘盧遮那仏 (びるしゃなぶつ) 龍門石窟



三法法でのS字型の石造



蓮華堂



蓮華堂の蓮華



何万対の石仏像の一部



萬仏洞正壁本尊阿弥陀如来





龍門(東山)



砂岩のため仏石が崩れ始めています



山壁は幾多の仏石のための洞穴

### 関林廟 三国志の英雄のひとり関羽を祭った廟である関林廟

洛陽の南 8 km の所にある唐の時代に作られた関林廟は明、清の時代に修復されました。「玄奘寺」「三国志」の英雄 関羽の首塚があります。後漢の建安 25 年正月(219)に曹操が関羽の首をこの地に埋葬した。林廟内には拝殿、正殿、二殿、三殿があり、漢白玉獅、鐘楼、鼓楼、碑亭・・・などがあり、関林は三国時代の英雄、関羽の墓です。孫権は魏の曹操に関羽の首を贈ったが、曹操はその首と上等な檀香木で作った体を洛陽で手厚く葬った。義を重んじ犠牲となった関羽を、民衆は各地に信仰の対象として祭ってきて、「武財神」として商売繁盛の神様、警察職業のお守り洛陽の関林は最古のものとされています。関羽像のほか、墓志碑や洛陽出土の獅子などの石像が展示されている。門や堂の壁面には、三国志の名場面が描かれ、清の乾隆帝や光緒帝や西太后御筆の額などもある。三殿の後方には高さ 20m あまりの盛り土の関帝塚がある。建物内には三国志の名場面が描かれた壁や、敵の首を切り落としたといわれる 2m の大刀、洛陽から出土された多くの石刻や石碑などが展示されている。関帝の名で人々に尊敬されている関羽の廟は、全国各地にいくつもがあるが、洛陽の関林堂は最古のものとされる。また、関林にある碑亭は精巧で、典型的な清時代の亭式建築だと言われている。1979 年関林は“洛陽古代芸術館”として開設され、河南省省レベルの重要文化財保護の認定を受けている。



林廟の山門



奥深い参道



後方には関羽の首塚



関羽



左に鼓楼



右に鐘楼



立派な大きな玉の印鑑



関羽の首塚



関羽の首塚



石碑